

---

# 会社でのあいつ

八松やより

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
会社でのあいつ

【Nコード】  
N5927Y

【作者名】  
八松やより

【あらすじ】  
とある夫婦の会社での一場面です。

重い扉を押し開けると、冷たい風が吹き付けてきた。思わず身震いしたが、俺はそれでも構わず外に出る。

月明かりが照らす夜のビルの屋上には俺ひとり。まあ、こんなクソ寒い中屋上に出るやつなんて、俺以外に誰もいないだろう。俺は胸ポケットからタバコを取り出し、火を付けながら手摺まで歩み寄る。吸った煙を空に向かって吐き出すと、タバコの煙は風に吹かれて夜の闇に紛れて消えた。

手摺に寄り掛かりながら、目の前の夜景を眺めてさらに一服。航空障害灯が一定間隔で点滅し、眼下の高速道路を車がテールランプを灯しながら過ぎ去る。ここからは見えないが、電車の走る音も聞こえる。

あらかた吸い終わった吸い殻を下に落として、残り火を靴で踏み消す。イライラが収まらないから、さらにタバコを一本取り出す。

それにしてもムカつく女だなと、火を付けながらさっきのことを思い出す。社長だからって偉そうに俺のことを説教しやがって、それが気に入らない。

発端は一本の電話からだ。取引先からの電話だったのだが、内容は商談を取り止めにしたというもの。何でも、営業に行った部下がその女性社員に手を出していたらしい。それぐらいならまだ良かったのだが、その女性社員というのが取引先の社長令嬢というからただ事では済まなくなった。事実を知った取引先の社長は即刻打ち切りを告げ、進んでいた商談もパアになってしまった。

かなり大きな商談だっただけに、うちの社長も大激怒。手を出した部下は地方へ飛ばされ、そいつの上司であった俺にも飛び火。部下の指導がなっていないとか散々怒鳴られた挙げ句、部下の尻拭いで残業をするはめに。

渋々従ってやっていたが、どうしても腹の虫が収まらないので夕

バコを吸いに来た。だが、二本吸っても収まらなかった。

三本目を吸おうとした時、後ろで扉が開く音がした。コツコツとヒールの音が響き、段々と俺の方に近付いてくる。振り向くとそこにいたのは同じ会社で働く妻の弓子であった。

「やっぱりここにいた。社長に怒られてすねて、きつとここにいるんだろうなって思った」

弓子は俺と並ぶように、手摺に寄り掛かりながらそう言った。  
「ほっとけ」

俺は三本目のタバコに火を付ける。

「まあ悪いのはあなたの部下だけど、上司であるあなたが指導不足で怒られても仕方ないんじゃない？ 大きな商談がなくなっちゃったんだから」

弓子は目の前の夜景を眺めながら、そう言った。

「何で年齢的にも社会的にも大人になつたやつに、そんな下らないことを注意しなきゃいけないんだよ。そんなのそいつの勝手だろ。しかも、そんなやつのは尻拭いで残業だよ」

煙を吐き出しながら、俺は弓子に言った。それを聞いて弓子は頷きながら答えた。

「確かにそうね。でも、営業に出る社員は会社の顔でもあるのよ？ 社員の姿はそのまま会社のイメージに結び付くわ。社員がダメなんじゃ、取れる商談も取れなくなる。だから、社員の指導も上司の大事な仕事よ」

俺は舌打ちしながら、吸い殻を踏み消す。

「けっ、説教は懲り懲りだったの。外で働く俺らは大変だったのに、お前は会社の中だからいいよな」

俺がそう言うと、弓子は片腕を手摺に預けながら俺の顔を見た。

「あら、中の仕事だって楽ではないのよ？ 私の場合は尚更。みんなの生活が掛かっているんですもの」

それを聞いて、俺は思わず笑ってしまった。俺はなんてつまらないことで不機嫌になっていたのだらう。こいつの背負う責任比べた

ら、俺の負う責任なんて大したことないじゃないか。四本目を取り出そうとしていた手を止めて、俺は弓子の方に向き直る。

「そうだったな、俺とお前とじゃあ責任の重さが違ったな。これは失礼しました、社長」

俺がそう言っていると、弓子は満足そうに頷いた。

「さあ、こんなところにいたら風邪をひくわ。もうお仕事おしまいにして、鍋食べに行きましょう？ 今日私がおごってあげる。そして、明日からまた頑張って、大きな商談持ってきてなさい」

言うだけ言っていると、弓子は俺の手を引っ張った。ほんとこいつには敵わないな。俺は弓子の手を強く握って、中へと戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5927y/>

---

会社でのあいつ

2011年11月18日04時12分発行